

『キング、クィーンそしてジャック』のベルリン

——大都市小説とはなにか——

諫 早 勇 一

ベルリンを舞台に、ドイツ人たちを主人公にしたウラジーミル・ナボコフの二作目の小説『キング、クィーンそしてジャック』 *Король, дама, валет* は、1928年にベルリンの「スローヴォ」社から刊行されたが、ドイツ人のナボコフ研究家Dieter Zimmerは、この1928年という年に注目し、ちょうどこのころドイツでも4つの「ベルリン小説」が刊行されたことを指摘している¹。つまり、Zimmerによれば、『キング、クィーンそしてジャック』はデーブリーの『ベルリン・アレクサンダー広場』などとも比較できる「大都市小説」²として読めることになる。

じつは、『キング、クィーンそしてジャック』に描かれたベルリンについては、これまでいくつかの議論があった³。作者のナボコフ自身は、英語版に寄せた序のなかで『キング、クィーンそしてジャック』の舞台は、ルーマニアやオランダにしてもかまわなかった。ベルリンの地図や気候になじんでいたことが、選択の理由だった⁴と述べて、ベルリンという都市を描くことが目的ではなかったことを示唆しているが、反論もある。たとえば、オットー・フリードリクは、この序文を引きながら、「しかしながら、ナボコフ自身のこのような否認にもかかわらず、『キング、クィーン、そしてジャック』は一九二〇年代のベルリンにおける生活の、すぐれて特徴的なポートレートをわれわれに見せてくれる⁵と語っているし、平井正氏も、ナボコフがベルリンとのかかわりを否定しようとしていることに対して、「しかしかれの小説『キング、クィーンそしてジャック』にしても、ベルリンとの関係が無いどころの騒ぎではない。それが文学であり仮象の世界であることには異議はないが、大西洋横断飛行士や流行歌まで、道具立ては一九二七年のベルリン風物詩と言ってよいほど、かれの生活の舞台の日々のディテールに支えられている⁶と述べて、この作品が執筆された当時のベルリンと不可分であると主張している。

これに対して、ロシア人のナボコフ研究家アレクサンドル・ドリーニンは、『キング、クィーンそしてジャック』にかんして、「読者は、何十という本や映画のなかで繰り返されている、この都市のおなじみのイメージに適うような、二十年代のベルリンの描写を小説に求めても無駄だろう。ナボコフのベルリンは、つかのまのロシア人住民が好んで貶したような、〈通りと通りが区別でき〉⁷ず、〈家々がスーツケースのように同じ形をした〉⁸、物憂げで、灰色の、退屈な都市でもなければ、輝かしく、多面的で、たえず変わりゆく〈モダニズム〉の首都でもない⁹と述べて、この小説に「黄金の二〇年代」と謳われたベルリ

ンの生活の反映を見ることを拒否している。

もちろん、こうした主張にはそれぞれ根拠があり、簡単に結論は出せないだろうが、忘れてはならないことがひとつある。それは小説『キング、クィーンそしてジャック』が、最初のロシア語版と、40年後にナボコフが息子のドミトリーと協力して刊行した英語版 *King, Queen, Knave* (1968) とで大きく異なっているという事実だ。1977年、ナボコフのロシア語小説とその英語版とを詳細に比較したGraysonは、英語版にさいして「著しい改変」major reworkingがなされた作品として、『暗箱』*Камера обскура* (英語版『暗闇の中の笑い』*Laughter in the Dark*)、『絶望』*Отчаяние*、『密偵』*Созлядамай* (英語版『目』*The Eye*) とこの『キング、クィーンそしてジャック』を挙げて¹⁰、細かく分析しているが、この作品にかんしては、フローベールの『ボヴァリー夫人』とのつながりの明確化、作品への作者の侵入、主人公たちの性格付けの変化、文体的変化などの分析が中心であり¹¹、ベルリンという都市の描かれ方の違いは論じられていない。だが、両者の間には、作品の舞台となっているベルリンの描き方をめぐって大きな違いがあり、それを無視してこの作品とベルリンとのつながりを論じることはできないだろう。あえて言わせてもらえば、この作品を「大都市小説」と見る論者たちは、おそらく後の英語版を通じてしかこの作品を知らないのではないだろうか。こうした観点から、本稿ではベルリンという都市の描き方を中心に、『キング、クィーンそしてジャック』のロシア語版と英語版とを比較し、この小説が「大都市小説」と呼べるかどうかを再検討してみたい。

すでに何度か指摘されていることだが¹²、ロシア語版『キング、クィーンそしてジャック』には、「ベルリン」という地名はいつさい出てこない。唯一「ベルリン」を連想させる箇所について、英語版とロシア語版を比べてみよう。

Berlin! In that very name of the still unfamiliar metropolis, in the lumber and rumble of the first syllable and in the light ring of the second there was something that excited him like the romantic names of good wines and bad women.¹³ (下線は引用者、以下同じ)

「ベルリン！まだなじみでない首都の名前そのものや、第1音節の重々しい雷鳴と第2音節の軽やかな響きのなかには、よいワインや邪悪な女性のロマンティックな名前と同じように、なにか彼を興奮させるものがあつた。」

Столица... В самом названии этой незнакомой еще столицы – в увесистом грохоте первого слога и в легком звоне второго – было для него что-то волнующее.¹⁴

「首都・・・まだ知らないこの首都の名前そのもの——第1音節の重々しい轟音と第2音節の軽やかな響き——には、彼にとってなにか興奮させるものがあつた。」

比較すれば明らかだが、ここでは英語版の「ベルリン」という固有名詞が、ロシア語版では「首都」という普通名詞で言い表されている。ただ、この箇所では、その首都の名前の第1音節が「重々しい轟音」(すなわち、ベル)にたとえられ、第2音節の「軽やかな響

き」(すなわち、リン)と対比されているから、首都とはすなわち「ベルリン」だと想像できるが¹⁵、あくまでそれは間接的な表現にとどまっている。では、このように英語版で「ベルリン」と明示されている箇所は、ロシア語版でどのように表現されているのだろうか。英語版で「ベルリン」の語は21箇所で見られているが¹⁶、それがほかの普通名詞に置き換えられているのは8箇所であり、うち6箇所では「首都」столицаが用いられ¹⁷、残りの2箇所では「都市」городが使われている。いくつか例を引き、対比される部分だけに和訳を添えてみよう。

A minor station flew past, just a platform, a half-opened jewel box, and all grew dark again as if no Berlin existed within miles. (KQK, 18) 「あたかも、あたりにベルリンなど存在しないかのように」

Промахнула мелкая станция, платформа под черным навесом, и снова стало темно, точно никакой столицы и близко не было. (КДВ, 142) 「あたかも、近くに首都などまったく存在しないかのように」

... that kind of three-button, narrow-lapelled blue jacket with a pin stripe had disappeared from most Berlin stores at least five years ago. (KQK, 9) 「少なくとも5年前に、たいていのベルリンの店から姿を消した」

... и что этот синий в частую белую полоску костюм уже пять сезонов как исчез из столичных магазинов. (КДВ, 136) 「首都の店から姿を消して、もう5シーズンになる」

“It's so quiet here,” said Franz. “I thought Berlin would be so noisy.” (KQK, 28) 「ベルリンはとてもうるさいのだろうと、ぼくは思っていました」

– У вас такая тишина... – сказал Франц. – Я думал, что город так шумен... (КДВ, 148) 「街はとてもうるさいと、ぼくは思っていました」

これに対して、残りの13箇所では「ベルリン」の語が用いられていないばかりか、ほかの語に置き換えられてもいない(ロシア語版のほうが先に書かれているから、正確に言えば、英語版にさいして、「ベルリン」の語がまったく新しく付け加えられている)。いくつか例を引き、また一部分に訳を添えよう。

“Well, why don't you have him come to see me in Berlin? ...” (KQK, 8) 「どうして彼を、ぼくに会いにベルリンに寄こさないのかい」

«Ну что ж, пускай он поедет ко мне, – я его устраю...» (КДВ, 135) 「彼をぼくのところに来させればいい」

Before leaving for Berlin he gave her a monkey which she loathed; ... (KQK, 66) 「ベルリンに発つ前に」

Он был очень веселый, пел смешным голосом, подарил ей белку, от которой дурно пахло... (КДВ, 173) (英語版ではサルをプレゼントするのが、ロシア語版ではリスになっているが、「出発前に」の記述はない。)

Question: Were they not too glamorous, too extravagant, too original and luxurious, for the needs of a todgy bourgeois store in Berlin? (KQK, 223)

(この一文に対応する箇所はロシア語版にはない。)

このように、英語版に登場する「ベルリン」は、ロシア語版で「首都」「都市」とあったものを具体的な地名に置き換えたもの、あるいは英語版にさいして新たに付け加えられたものであり、ロシア語版原作を読むかぎり、小説の舞台がベルリンであることは推測の範疇を超えるものではない¹⁸。小説の舞台は、『断頭台への招待』(1935-36)の舞台のように、けっして明確なものではない¹⁹。

さて、英語版には「ベルリン」という都市名が出てくるばかりでなく、通りの名前などの地名も登場する。だが、こうした地名もロシア語版にはまったくない²⁰。具体的に眺めれば、英語版では(フランツがベルリンに到着した翌朝を描いた)第2章には「フリードリヒ街」が言及される(All the festive lights of Friedrichstrasse had been stamped out by his boot.) (KQK, 21)が、ロシア語版にはこれに対応する記述はない。さらに、第3, 9, 10章には「グルーネヴァルト」(KQK, 66, 182, 203)、第6, 10章には「クーアフルステンダム」(119, 195)、第9章には「ティアガルテン」(174)と、ベルリンを代表する地名が登場するが、これまた固有名詞として触れられることはない。ただ、時としてこれらの地名は、それを想起させる普通名詞で表現されている。いくつか例を引き、また一部分だけ訳を添えてみよう。

Thus promenaded the Kurfürstendamm dandies, sometimes in pairs, now and then looking around at a girl without changing the position of their hands but merely giving a slight backward jerk of the shoulder. (KQK, 119) 「クーアフルステンダムのダンディーたちは、こんなふう闊歩した」

Так шествовали все молодые щеголи по той нарядной улице, – изредка оглядываясь на женщин, – не меняя при этом положения рук, а лишь слегка дернув плечом; и опять – врозь, врозь, раз-два, очень медленно. (КДВ, 208) 「若いダンディーたちはみな、あのきらびやかな通りをこんなふうに行進していた」

He listened to her rapid chatter and recalled a thousand trifles, (中略) the paunchy kings of

moonlit stone in the Tiergarten, so dignified on a spring night with the lilacs in gray fluffy bloom under the arc lights, and moving patterns on the white stairs. (KQK, 173-174) 「ティアガルテンの、月に照らされた石像の、太鼓腹の王様たち」

Он слушал ее проворный лепет и вспоминал тысячу мелочей: (中略) аллею памятников в центральном парке, – и то, как эти смешные пузатые короли были чудесно хороши лунной ночью, среди цветущей, электрическим светом убеленной сирени... (КДВ, 243-244) 「中央公園の、記念像が並んだ小道」

His colleagues in the sports department, (中略) advised him to sunbathe on the banks of the Grunewald lake on Sundays. (KQK, 203) 「日曜ごとにグルーネヴァルトの湖の岸で日光浴するよう、彼に勧めた」

Его коллега по отделу, (中略) посоветовал купаться по воскресеньям в озере, жариться на солнце. (КДВ, 262) 「日曜ごとに湖で水浴し、日光浴するよう勧めた」

クーアフルステンダムは当時、ベルリン随一の繁華街だったし、ティアガルテンはいわばベルリンの中央公園、そしてグルーネヴァルトには湖があるから、ロシア語版の記述は固有名詞を単純に普通名詞に置き換えたものといっている（これも時代的に正確に言うなら、ロシア語版では普通名詞で表されていたものが、英語版にさいして固有名詞で表現されるようになった）。つまり、ロシア語版でナボコフは、すでに具体的な場所をイメージしていたのだろうが、それをあえて固有名詞のかたちで表現しようとはしなかった。ところが、英語版ではそれを具体化させ、明確化させたことになる²¹。では、なぜ英語版においてこうした改変が行われたのだろうか。

容易に考えられる理由は、英語版にさいして新たな読者（これまでの亡命ロシア人とはちがった読者）の便宜を図ったという可能性だろう。実際、ナボコフは『マーシェンカ』の序のなかでも、「亡命者仲間には自明でも、外国人の読者には理解できない」「日常的なロシア的事象」²²に関する記述を改めたと述べているように、翻訳にさいしてこうした細かい配慮を忘れなかった。だが、ナボコフの配慮は新たな英語版の読者だけに向けられたものだろうか。

じつはベルリンという都市を舞台にしながらか、具体的な地名の言及を避けた小説は『キング、クィーンそしてジャック』だけではない。この小説の前に書かれた最初の小説『マーシェンカ』*Машенька* (1926) でも、この小説の後に書かれた三作目の小説『ディフェンス』*Защита Лужина* (1929-30) でも、小説のおもな舞台はベルリンだが、(「ベルリン」²³を除けば) 固有名詞は潔癖なまでに避けられている。

まず、『マーシェンカ』では、主人公ガーニンが住む(鉄道線路に面した)下宿屋をはじめ、すべての場所の地名は明示されていない。場所の手がかりになるのは、わずかに位置関係をほのめかす語だけだ。「北地区」(КДВ, 49)、「ベルリン郊外の湖」(КДВ, 52)、「ベ

ルリンの遠方地域」(КДВ, 61)、「町はずれの別の駅」(КДВ, 127)などのように。そして、『ディフェンス』では、そうした位置関係を示す語さえほとんど見当たらない。主人公ルージンの恋人一家が暮らす家のなかは細かく描かれているにもかかわらず、その家がどこにあるかにはまったく触れられていない。

このようにナボコフのロシア語小説のうち最初の三作からは、ベルリン市内の地名はまったく消し去られているにもかかわらず、第四作の『偉業』*Подвиг* (1931-32) はすっかり様相を異にしている。作品の舞台はロシアのほか、イギリス、ドイツ、スイス、フランスなどさまざまな国々におよんでいるが、全体として具体的な地名に溢れているのだ。話をベルリンにかぎって具体的な地名、固有名詞を列挙してみても、「クーアフルステンダム」²⁴、「シャーロツテンブルク」²⁵、「グルーネヴァルト」²⁶、「ポツダム通り」²⁷、「タウエンツィーエン通り」²⁸といった地名のほか、「ヴィンターガルテン」²⁹、「ブランデンブルク門」³⁰、「ヴェルトハイム」(デパート)³¹、「カイザーホフ」(ホテル)³²、「アンハルター駅」³³、「フリードリヒ駅」³⁴といったたくさんの固有名詞がすぐに挙げられる。『偉業』のベルリンはこれまでの三作とはちがって、具体的なイメージに溢れている。では、以前の三作と『偉業』とのちがいはなにに起因するのだろうか。

容易に思いつく理由は、第三作『ディフェンス』の成功により、ナボコフが亡命世界全体に認められたという事実だろう。新進作家ナボコフ(当時のペンネームでいえばシーリン)は、詩人として文学活動を始めるが、1926年に発表した『マーシェンカ』の成功以来、小説家としての名声を高めていく。だが、その成功はあくまでベルリンの亡命社会というかぎられた空間での成功にすぎなかった。ところが、1929年から第三作『ディフェンス』が、パリで刊行されていた亡命ロシアを代表する総合誌『現代雑記』*Современные записки* に連載されたことにより、その名声は亡命世界全体に広がっていく³⁵。したがって、1930年『現代雑記』の編集者フォンダミンスキイみずからが、ベルリンまで足を運んで「青田買い」した³⁶『偉業』にかかるナボコフの意気込みはことのほか大きかったはずだ。ベルリンのローカル作家ナボコフが前三作で、いわば仲間内なら明示しないでもわかる世界(ロシア風に飾り立てたルージン夫人の実家の描写を読めば、当時の読者にはベルリン南西部のしかるべき家が思い浮かんだことだろう)を描いたのに対し、亡命の若い世代の代表と称された30年代のナボコフが、より広い範囲の読者を想定して第四作『偉業』に取り組み、パリの読者などにはわからないベルリンの地理を明確化したとしても驚くにあたらないだろう。後の英語版で見せたのと同じ配慮が、ここに感じられるといてよい。

話を『キング、クィーンそしてジャック』に戻すなら、ロシア語版で「ベルリン」という都市名が省かれ、地名を表す固有名詞がすっかり除かれている理由の一つは、想定される小説の読者³⁷にとって、容易に想像がつく空間が舞台になっていたからといえるだろう。だが、自明だからという理由だけですべてを割り切るわけにはいかない。「ベルリン」という都市名さえ除かれた裏には、やはり具体化とは反対の方向、すなわち小説の舞台をより普遍化して、具体的なイメージを薄めようという意図も隠れていたにちがいない³⁸。それ

を考察するために、つぎに英語版において大きな意味を持っている「デパート」について考えてみよう。

「黄金の二〇年代」のベルリンを論じた本は、たいがい消費文化の新たなシンボルとしてデパート（百貨店）に注目している。一例として平井正氏の著を引いてみよう。

その背景には大量消費時代に入った都市の爆発的発展があった。そして旧時代の豪華さの代表がオペラ劇場やホテルだったとすれば、新時代の「大衆的」豪華さの代表は、百貨店であり、大衆レストランだった。「一銭のお金でデラックスな夢」——そうしたモットーの下に、百貨店は宮殿のような華麗さを競った。もちろんライブチヒ街にある欧州最大の百貨店ヴェルトハイム [すでに見たように、第四作『偉業』に登場していた一引用者注] も、同じライブチヒ街にある競争相手のティーツも、すでに大戦前に作られていた。しかし今やそれは、映画館と同じく大衆に夢を売る場所としてブームになった。³⁹

カールシュタット百貨店はまだできていなかったとはいえ（1929年6月開店）⁴⁰、ヴェルトハイム、ティーツなどの百貨店が豪華さを競った当時のベルリンは、まさしくデパートの街だった。とすれば、デパートのオーナーであるドライヤー（作品の「キング」に当たる）、そのデパートに売り子として雇ってもらったフランツ（「ジャック」に当たる）、そして「百貨店世界の虚栄にひたる西区有閑マダム」⁴¹と呼ばれてもおかしくないようなマルタ（「クィーン」に当たる）の3名が織り成す恋愛模様は、当時の過剰な消費文化の反映として読めるだろう。そう読めば、この作品を「大都市小説」と読むことも不可能ではなくなるはずだ。だが、ナボコフの意図はそこにあったのだろうか。ここでも英語版だけに引きずられないために、ロシア語版と英語版を比較してみよう。

英語版では、デパートを表す *emporium* という語が作品中にしばしば用いられている。まず、第1章で列車がベルリンの街に入ると、フランツは期待をこめてここでの生活を思い描くが、想像のなかの自分は「明るく照らされたデパートで」(*in a brilliantly lit-up emporium*)(KQK, 13) 忙しそうに働いている。だが、ロシア語版では「光り輝く店で」(*в сияющем магазине*)(КДВ, 139) 歩き回っているにすぎない。そして、第2章でドライヤーの家を訪ねたフランツは、マルタから「でも、きっともうあなたは、あの人の有名なデパートの話を知っているわね」(*But then I'm sure you've already heard about his celebrated emporium.*)(KQK, 29) と念を押される。しかし、ここでもロシア語版では「もちろん、あなたはもう店のことを知っているわね」(*Ну вы, конечно, уже слыхали о магазине...*)(КДВ, 149) とあるだけで、「デパート」という語は出てこない。ドライヤーは男物の衣料品を扱う店のオーナーにすぎず⁴²、フランツは「おじさんの衣料品店〈ダンディー〉の見習い店員」⁴³にすぎない。

ただ、英語版で用いられているのは、*emporium* の語だけではない。数は多くないが、*department store* という語も用いられている。たとえば、第7章ではドライヤーについて、「ダ

ンディー・デパートのオーナー」(owner of the Dandy department store)(KQK, 132)と描かれているし、第 9 章には「もし私の妻が君のデパートを訪れて」(if my wife visited your department)(KQK, 177)という問いかけもある。だが、この場合でもロシア語版では「ダンディー商店のオーナー」(владелец магазина «Дэнди»)(КДВ, 216)、「もし私の妻が私の店にやってきて」(если б вот моя жена вошла в мой магазин)(КДВ, 246)とあるだけで、「デパート」ではなく、「店」という表現にとどまっている⁴⁴。第 3 章で一箇所だけ、英語版で「ドライヤーのデパート」(Dreyer's emporium) (KQK, 58)とあるところが、ロシア語版で「ドライヤーの大きな店」(огромный магазин Драйера)(КДВ, 167)となっているが、これだけでロシア語版の「店」を「デパート」と同義と考えることはできないだろう。英語版の与える印象とは大きく異なり、ロシア語版は、1920 年代後半の華やかな消費文化の都ベルリンという特定の世界を描くことに、さほど関心を示していない。

では、つぎにエンターテインメントの都ベルリンについてはどうだろうか。英語版に頻出する映画館建設の話（フランツの下宿のすぐそばに建設中で、そこではこけら落としに、映画『キング、クィーンそしてジャック』が上映されることになっている）が、ロシア語版にはまったく描かれていないことについては、私もすでに論じたことがあるし、Proffer の論もあるが⁴⁵、二つの版のちがいを際立たせるために簡単におさらいしてみよう。まず、第 3 章で下宿探しに出かけたフランツは、ある下宿に心を惹かれる。「角には、主人が映画館になるはずだという宮殿のようなものが建築中で、それが周囲に活気を与えていた」(A palace-like affair that the landlord said would be a movie house was being built on the corner, and this gave life to the surroundings.)(KQK, 48)。当時のベルリンには宮殿(Palast)と呼ばれるような豪華な映画館がいくつもあったことはよく知られている⁴⁶。下宿脇に建築中の建物もそんな豪華な映画館なのだろう⁴⁷。だが、ロシア語版ではこれに類した記述はいっさいない。この下宿を描くとき、英語版ではしばしば、そばで建設中の映画館（「シネパラス」Cine-palace と呼ばれる）に言及され、その建設の進捗状況に合わせて、フランツとマルタとの不倫関係も深まっていくが、ロシア語版ではそうした並行関係は存在しない。「フランツの住んでいた通りは、静かで貧しく、行き止まりになっていた」(Улица, где жил Франц, была тихая, бедная, кончавшаяся тупиком...)(КДВ, 195)にすぎない。英語版をもとに、この作品には、当時のベルリンにおける映画の隆盛が描かれていると考えたとしたら、それは大きな誤解だろう。もちろん、若いフランツは映画とまったく無縁ではなかった。しかし、彼と映画との結びつきを表す第 5 章の記述は、「金曜日に彼は映画に出かけ、土曜日にはカフェに出かけた」(В пятницу он пошел в кинематограф, в субботу – в кафе)(КДВ, 190)という、ベルリンという特定の場とはかかわりのない、ありふれたものにすぎない。ロシア語版は映画・映画館の描写にかんしても、きわめて禁欲的である。

このように当時のベルリンのエンターテインメント⁴⁸も、ロシア語版では地味な扱いしか受けていないが、唯一例外ともいえるのが「ヴァリエテ」だ。（すでにフランツとマルタが不倫関係を結んだ）第 6 章で、ドライヤー、マルタ、フランツの 3 人は、ロシア語版で

は「ミュージック・ホール」(мюзик-холл)(KDV, 204)に、英語版では「ヴァリエティ・ショー」(variety show)(KQK, 115)に出かける。これは、妻の不倫にまだ気づいていないはずのドライバーが、退屈な出し物を見ながら「こんなけがらわしい話がいつになったら終わるのか、教えてくれ」(Скажите мне, когда эта мерзость кончится.)(KDV, 206)とつぶやいて、手を握っていた二人を焦らせるという場面だが、そんなたわいもないエピソードのわりには出し物の描写のくわしさに驚かされる。ここには「ヴィンターガルテン」のような当時の「ヴァリエテ」の様子が生き生きと伝えられているといっても過言ではない。

まだ少年だったナボコフは、1910年にベルリンで、家庭教師のゼレンスキを口説いて「ヴィンターガルテン」に連れて行ってもらった⁴⁹。そして、その印象が強かったためか、『偉業』では、同じ年頃の主人公を「ヴィンターガルテン」に行かせている⁵⁰。では、「ヨーロッパ最大のヴァリエテ」⁵¹「ヴィンターガルテン」とはどんなものだったのか、平井正氏の説明から引いてみよう。1882年フリードリヒ街駅の向かいに、「ツェントラール・ホテル」が建設され、そこに「大きなガラスの屋根を持つ熱帯ヤシの大温室「ヴィンターガルテン」」⁵²が作られたが、1888年、そこに小さな舞台が設けられ、アーティストが出演するようになったという。以下平井氏の言をそのまま掲げる。

ドルンとバロンが支配人となってから、ヴァリエテ時代が始まった。かれらはガラスの天井を黒く塗り、そこに炭素電球を吊り下げた。それが「ヴィンターガルテン」のトレードマークとなった、有名な「星空」である。一八九五年には、スクラダノフスキー兄弟が、この舞台で最初の「活動写真」を見せた。一九〇〇年には、お客の増大のため、舞台とテラスが拡張された。イヴェット・ギルベール、フリッツィ・マサーリといった、シャンソンやオペレッタの女王も登場したが、映画にも出た三人コドナスの「サルトル・モルターレ三回転宙返り」は「飛行する人間」として有名になった。そしてオットー・ロイターが、かれの不滅の「クブレ小唄」を歌った。マーリカ・レックがキャリアを開始するのも、ここであり、例のティラー・ガールズも出演した。世界的に有名な出し物が、ここに集まり、ここに雇われることが、雑芸家の榮譽となった。⁵³

では、ロシア語版ではこの「ミュージック・ホール」はどう描かれているのだろうか。順を追って引用してみよう。まず、劇場にかんしては、「まだ開いていない巨大なステージを持ち、広々して、収容人数も多い」(просторном, многолюдном, с гигантской, еще не распахнувшейся сценой)(KDV, 205)とあり、フランチは席数をおよそ2千と見積もっている。ここはキャバレーのような比較的小さな空間ではなく、「ヴィンターガルテン」を思わせるような巨大な劇場なのだ。そして、出し物が始まる。山高帽をかぶった男による瓶を使った曲芸、ブランコに乗った4人の日本人や道化師の登場、白馬やアザラシ、オートバイ乗りの家族など、ステージはめまぐるしく移り変わっていく。一瞬下がった幕がまた上がると、ステージにはヴァイオリンを弾く女性が現れる(ドライバーが退屈するのはこの

ときだ)。そして、「世界中で名を知られた魔法使い」(всемирно знаменитый волшебник)(КДВ, 206)の舞台が終わると、いよいよ「映写機」が発明されて以来、「すべてのサーカスやミュージック・ホールでお決まりになった」(как это принято во всех цирках и мюзик-холлах)(КДВ, 206)「映画」⁵⁴(кинематографической картиной)(КДВ, 206)でショーは幕を閉じる。

ここで細かく描かれるショーのようすが、当時の「ヴィンターガルテン」そのままだったかどうかはわからない。しかし、壮大な劇場、音楽・曲芸・動物・道化師、さらには映画を売り物にしたショーの構成は当時の「ヴァリエテ」を念頭において書かれたとってまちがいないだろう。この場面は疑いなく、同時代のベルリンのエンターテインメントの世界の一端を映している。

だが、果たして「ヴィンターガルテン」は、一九二〇年代のベルリンを代表するものだろうか。先に触れたように、ナボコフがはじめてこの「ヴァリエテ」に惹かれたのは、一九一〇年代はじめのことだったし、『偉業』のマルティンにとっても事情は同じだった。そして、平井氏の紹介からもわかるように、「ヴィンターガルテン」の栄光は十九世紀末からはじまっていた⁵⁵。さらにいえば、「ヴィンターガルテン」は東区の繁栄のシンボルともいえる存在であって、「黄金の二〇年代」における西区⁵⁶の発展とは直接かかわりがない。こう考えると、やはりこの作品を貫く一種のアナクロニズムを考えないわけにはいかない。

先に英語版では「クアフルステンダム」等の地名が記されていると述べたが、じつは作品中に頻出しながら、英語版でも地名が明記されない場所が一つある。東区のメインストリート「ウンター・デン・リンデン」だ。そして、この大通りは首都にやってきたフランスにとって憧れの通りでもあった。作品の冒頭から振り返れば、フランスたちを乗せた急行列車は、「巨大な菩提樹の老木が植えられた有名な大通りを」(по знаменитому проспекту, обсаженному исполинскими древними липами)(КДВ, 139)走っていくが、英語版でも「彼のために巨大な菩提樹の老木を並べた有名な大通りに沿って」(along the famous avenue lined for him with gigantic ancient lindens)(КДВ, 13)とあるだけで、具体的な地名は記されていない。ロシア語版でも英語版でも「菩提樹＝リンデン」によって、地名が暗示されるにすぎない。そして、このことを確認するかのように、次の文には「急行は、大通りの名前からふさふさと伸びて茂った、これらの菩提樹のわきを通り過ぎた」(Промчал экспресс мимо этих лип, пышно выросших из названия проспект, ...)(КДВ, 139)とあり、英語版でも「急行は、大通りの響きのよい名前から豊かに伸びて茂った、これらの菩提樹を急いで通り過ぎた」(The express sped past those lindens grown so luxuriantly out of the avenue's resonant name, ...)(КДВ, 13)とある。

だが、ベルリンのシンボルのようにフランスを迎えてくれたこの大通りは、かつての輝きを失っていた。まだ約束された仕事に就けないフランスは、第3章でベルリンの街の探索に出かける。「彼の考えでは、もっとも〈首都らしい〉地区」(самую, как ему казалось, «столичную» ее часть)(КДВ, 167)を見て回ろうとして。そして、「たくさんの船会社のオ

フィスや、美術商の店が並んでいた、広くて退屈な通り」(широкою скучную улицу, где было много пароходных контор и магазинов картин)(КДВ, 167)に出るが、通りのプレートから、自分が「かつてあれほど華やかなものと夢想していた大通り」(на том проспекте, который некогда так пышно снился ему)(КДВ, 167)に来ていることに気づく。さらに、ドライヤーの店を探しながら、「フランツは、首都が西に移ったことを知らないままに、彼の考えでは、もっとも豪華な店があり、もっとも生き生きとした商売が行われているはずの中央部や北部の通りをさまよい歩いた」(И, не зная, что столица передвинулась на запад, Франц бродил по центральным и северным улицам, где, по его мнению, должны быть наряднейшие магазины, оживленнейшая торговля, ...)(КДВ, 168)。いなかから出てきたばかりのフランツは、当時のベルリンの街のようすを誤解したアナクロニスティックな存在として描かれているとよい。

もちろん、第4章で「今日にいたるも、彼は自分の住む閑静な地区と、街の反対の端にある大通り地区⁵⁷しかなじみではなかった」(До сего дня он успел изучить только тихий район, где жил, да район проспекта, в другом конце города.)(КДВ, 173)と書かれたフランツは、しだいにクーアフルステンダムを中心とする西区の繁華街にもなじんでいく。実際第6章では、「日曜日ごとに、街の西地区のきらびやかな通りを、彼はまったく違ったようすで歩いていた」(По воскресеньям, на нарядной улице в западной части города, он ходил совсем иначе, ...)(КДВ, 208)と書かれるのだから。とはいえ、作品の中心は西区の新しい文化のなかで、水を得た魚のように生き生きとふるまうフランツにおかれてはいない。すでに見たように、そういう印象を与えるとしたら、それは英語版による改作を抜きにしては考えられない。ロシア語版に見るフランツは、大都市のまぶしい光に幻惑されつづける、いなか出の青年にすぎない。

こう考えてくると、ロシア語版で「ベルリン」という地名が除かれていることには別の効果が見えてくる。すなわち、地方出身者の目から見た大都市という存在を一般化し、抽象化するという機能だ。そして、それを裏付けるかのように、じつは英語版でも「ベルリン」ではなく、「首都」「大都市」という表現がしばしば用いられている。たとえば、第2章ではじめてフランツの訪問を受けたマルタは、彼に尋ねる。「私たちの大都市を訪れるのは、ほんとうにこれがはじめてなの」(This is your first visit, isn't it, to our great city?)(KQK, 30)と。ロシア語版の「あなたが首都に来たのは、ほんとうにはじめてなの」(Вы в столице впервые, не правда ли?)(КДВ, 150)というセリフを英語にすると、「ベルリンに来たのは、はじめてなの」としても、これまでの例から見れば、少しもおかしくないはずだ⁵⁸。しかし、あえてナボコフは、英語版でも「ベルリン」という語を用いなかった。ほかにも例を引こう。第3章では、フランツがはじめてベルリンの街を散策すると、「ひとつだけ自分が首都にいることを実際に教えてくれるものがあつた。いく人かの散策者がびっくりするような服を着ていたのだ」(Only one thing really told him he was in the metropolis: some strollers wore marvellous clothes!)(KQK, 46)とある。また、同じ第3章の、先ほどロシア語

版を引いた箇所少し前には、「こうしていやおうなしに彼は、街を、というよりむしろ、彼にはもっとも首都らしいと思える地区を探検した」(Thus perforce he explored the city, or rather what seemed to him its most metropolitan section.)(KQK, 57)と書かれている。「ベルリン」という具体的な地名より、「首都」「大都市」という抽象的なことばのほうが、おそらく地方出身者の驚きや好奇心を表現するのにふさわしいにちがいない。

したがって、フランツの頭のなかでは、しばしば「首都」「大都市」は、自分が住んでいた「いなか」と対比される。以前くわしく論じたことがあるが⁵⁹、ドライヤー夫妻は(英語版に明示されているように)、当時富裕な実業家たちが多く住んでいたグルーネヴァルト地区に、一戸建ての家を構えていた。しかし、最初フランツにはこのベルリンの南西部が気に入らなかった。なぜなら、「この地区の通りは静かで、実際のところ、首都の通りのあるべき姿とはちがっていた」(Улицы в этом квартале были тихие, какими, собственно говоря, не полагалось быть улицам столицы.)(КДВ, 159)し、「あまりにもいなかを思い出させすぎた」(Это слишком напоминало провинцию.)(КДВ, 159)のだから。彼の価値観からすれば、首都はいなかとは正反対でなければならない。また第8章では、ベルリンのダンスホールやカフェになじんできたフランツについてこう描かれる。「はやりのホールやカフェのあらゆる響きのよい名前——熱帯風やクリスタル風、あるいは王侯風の——は、かつて自分が現実に暮らしていたあの小さな町の通りの名前同様に、彼にはなじみのものになった」(и все звучные названия модных зал и кафе – тропические, хрустальные, королевские – стали ему так же знакомы, как названия улиц в том городке, где он когда-то жил наяву)(КДВ, 229)と。ベルリンになじんでいくフランツにとって、いなかの記憶はけっして愉快なものではない(そこに住んでいたのは、まぎれもない「現実の」наяву出来事なのだが)。しかし、その記憶は執拗に彼に付きまとい、たえず彼の思考を過去との対比に向かわせる。結局フランツは、いなかから野望を持って首都に出てきた典型的な一人の青年なのだから⁶⁰。

そんな青年の野望は、しばしばその捌け口を女性に求める。ロンドンに着いた『偉業』のマルティンが、夜の街での女との出会いに憧れたように⁶¹、フランツもベルリンの街で女性と知り合うことを夢見る。「故郷の小さな町」(В родном городке, ...)とは「ここは事情がちがう」(а тут дело другое)。「ここの女性たちは手に届くところにいる」(эти дамочки доступны)(КДВ, 160)のだ。だが、意外なことにフランツの手に落ちたのは、「別の世界に住んでいる」(живет в другом мире)ように見えて、「彼女はとても手が届かない」(Она совсем недоступна, ...)(КДВ, 168)と感じられたマルタだった。そして、マルタという女性に導かれるようにして、フランツは大都市での生活になじんでいき、マルタの夫ドライヤーを殺して、その財産と妻を奪うという野心的な計画にはまってしまう。

だが、『キング、クィーンそしてジャック』という題名そのものが暗示するように、こうしたプロットはけっして新しいものではない⁶²。いなかから出てきた青年が、女性を導き手として大都市で野望を遂げようとする物語は、19世紀フランス小説を考えただけでも、いくつも思い浮かぶだろう⁶³。とすれば、この小説の登場人物たちが19世紀フランス小説

の登場人物たちに似ているだけでなく、この小説のベルリンも19世紀のパリに似ているとはいえないだろうか。人間の欲望をあおるために、いろいろな舞台を用意し、人をその奥底に誘いながら、じつは人間の欲望とはあくまでも無関係を装う大都市——小説中の大都市をこうしたイメージで捉えるなら、その大都市とは、作者ナボコフもいうように、ベルリンでなくてもよいはずだ。『キング、クィーンそしてジャック』のベルリンとは、けっして一九二〇年代後半のベルリン、同時代のベルリンではなく、むしろアナクロ的に時代をさかのぼり、おおまかにスケッチされた位置関係だけをとどめた抽象化された大都市といえるのかもしれない。

1928年に発表されたロシア語版の『キング、クィーンそしてジャック』は、たしかに「大都市小説」と呼べる一面を備えている。だが、それは同時代のベルリンを活写して、大都市の実像を浮かび上がらせたという意味ではなく、19世紀のパリを舞台にしたバルザックやゾラなどのフランス小説がそう呼べるかぎりではない。

注

- 1) Cf. Zimmer, D.E. *Nabokovs Berlin*, Nicolai: Berlin, 2001, S. 12. なお、Zimmerによれば、その4作とは、Vicki Baum (*Menschen im Hotel*), Alfred Döblin (*Berlin Alexanderplatz*), Leonhard Frank (*Bruder und Schwester*), Erich Kästner (*Fabian*)の4作。
- 2) ラカーは、『ベルリン・アレクサンダー広場』について、「この小説は、ドイツ文学のなかで大都市がテーマとしてよみがえったただ一つの機会であった」と述べている。ウォルター・ラカー『ワイマル文化を生きた人びと』(脇圭平、八田恭昌、初宿正典訳)、ミネルヴァ書房、1980年、163ページ。また、デーブリーンの『ベルリン・アレクサンダー広場』に付された訳者による解説では、この作品を「ベルリンが主人公である大都市小説」と規定している(なお、ここでは「大都市小説」の先例としてジョイスの『ユリシーズ』、ドス・パソスの『マンハッタン乗換駅』が挙げられている)。アルフレート・デーブリーン『ベルリン・アレクサンダー広場』上(早崎守俊訳)、河出書房新社、1971年、234ページ。
- 3) Fieldはすでに1967年に、この小説は「ドストエフスキやブーニンのペテルブルグになじんだ作家による、ロシア人の目を通して見たベルリン」(*Berlin as seen through Russian eyes by a writer familiar with the St. Petersburg of Dostoevsky and Bunin*)ではないと述べている。Field, A. *Nabokov: His Life in Art*. Little, Brown & Co.: Boston, 1967, p. 158.
- 4) Nabokov, V. *Foreword. King, Queen, Knave*. (Translated by Dmitri Nabokov in collaboration with the author.) Weidenfeld & Nicolson: London, 1968, p. vi.
- 5) オットー・フリードリク『洪水の前：ベルリンの1920年代』(千葉雄一訳)、新書館、1985年、97ページ。
- 6) 平井正『悲劇と幻影の時代』、せりか書房、1980年、351ページ。
- 7) アンドレイ・ベールイのことば(Одна из обитателей царства тенейより)。
- 8) ヴィクトル・シクロフスキのことば(*Zoo, или Письма не о любви, или Третья Элоиза*より)。
- 9) Долинин, А. *Истинная жизнь писателя Сирина: первые романы*. Владимир Набоков. *Собрание сочинений русского периода в пяти томах*. Том 2. Симпозиум: Санкт-Петербург, 1999, С. 17-18.
- 10) Grayson, J. *Nabokov Translated: A Comparison of Nabokov's Russian and English Prose*. Oxford UP: Oxford, 1977, p. 23. またClancyは、この作品を「彼の初期の全作品のなかで、もっと

- も広汎に改作された」(the most extensively rewritten of all his early works)作品と捉え、改作の主な特徴を挙げている。Clancy, L. *The Novels of Vladimir Nabokov*. Macmillan: London, 1984, p. 25.
- 11) Ibid., pp. 90-118. なお、拙稿「「足場」の推移——ナボコフのロシア語小説とその英訳から——」(『東京大学文学部研究報告 語学文学・行動学論文集』6、1979)では、英語版で新たに付け加えられた映画館建設の記述について論じている。p. 293-311. このほか Connolly はエロティックな要素の増加を指摘している。(Connolly, J. *King, Queen, Knave*. Alexandrov, V. (ed.) *The Garland Companion to Vladimir Nabokov*. Garland: New York, 1995, p. 205.)
 - 12) См. Букс, Н. *Эшафот в хрустальном дворце: О русских романах Владимира Набокова*. Новое литературное обозрение: Москва, 1998, С. 42. Урбан, Т. *Набоков в Берлине*. (Перевод с немецкого С.В. Рожновского.) Аграф: Москва, 2004, С. 116. なお、ブクスによれば、これについてはすでに Zimmer が指摘していたという。См. Букс, С. 43.
 - 13) *King, Queen, Knave*, p. 13. 以下、作品の引用は本文中で KQK, 13 のように表記する。
 - 14) Набоков, В. *Король, дама, валет. Собрание сочинений русского периода в пяти томах*. Том 2, С. 139. 以下、作品の引用は本文中で КДВ, 139 のように表記する。
 - 15) 5 巻作品集の注では、ここで「ベルリン」が暗示されていることが、(親切にも)解説されている。Там же, С. 699.
 - 16) ほかに 1 箇所 Berliner (a nostalgic Berliner)が用いられている例がある。KQK, 21.
 - 17) 「首都の」столичный という形容詞も含む。なお、ブクスは、英語版の「ベルリン」がロシア語版ではみな「首都」となっているかのように論じている。См. Букс, С. 42.
 - 18) なお、Urban は黄色い二階建てバス、白と黒の正方形の縞のついた暗緑色のタクシー、暗青色の四角形に白い U の文字 (地下鉄のマーク) などから、この街がベルリンだとわかると述べている。См. Урбан, С. 116.
 - 19) もちろん、Rampton もいうように、この作品の舞台は、「たまたまドイツと呼ばれた想像上の国」(an imaginary country that happens to be called Germany)ではない。Rampton, D. *Vladimir Nabokov: A Critical Study of the Novels*. Cambridge UP: Cambridge, 1984, p. 16. なお、ブクスは都市名が書かれていないことは、「小説の正確な舞台がどこかは無意味」(нулевым значением точного места действия романа)なことを示すと述べている。Букс, С. 43.
 - 20) Edmunds によれば、人物の名前にかんしても、ロシア語版で無名だった人物が、英語版ではしばしば名前をつけられているという。Cf. Edmunds, J. *Look at Valdemar! (A Beautified Corpse Revived)*. Nabokov Studies, Vol. 2, 1995, p. 156.
 - 21) このことについては、グルーネヴァルトを例にとりて論じたことがある。拙稿「都市の見取り図 ナボコフのベルリン」、『言語文化』第 6 巻第 4 号、2004 年、556—557 ページ参照。
 - 22) Nabokov, V. *Introduction. Mary*. McGraw-Hill: New York, 1970, p. xiii.
 - 23) 『マーシェンカ』では、冒頭の第 1 章の会話のなかに「ベルリン」という固有名詞が出てくる。См. Набоков, В. *Машенька. Собрание сочинений*. Том 2, С. 47. また、『ディフェンス』では、チェスの試合が行われる場所、主人公ルージンの恋人の住む場所がベルリンであることは明示されている。См. Набоков, В. *Защита Лужина. Собрание сочинений*. Том 2, С. 365, 366.
 - 24) Набоков, В. *Подвиг. Собрание сочинений*. Том 3, 2000, С. 113, 196, 235, 239.
 - 25) Там же, С. 113.
 - 26) Там же, С. 196, 235.
 - 27) Там же, С. 232.
 - 28) Там же, С. 239.
 - 29) Там же, С. 113.
 - 30) Там же, С. 185, 233.
 - 31) Там же, С. 196.
 - 32) Там же, С. 197.
 - 33) Там же, С. 232.
 - 34) Там же.

- 35) このあたりの事情については、cf. Boyd, B. *Vladimir Nabokov: The Russian Years*. Princeton UP: Princeton, 1990, pp. 341-343.
- 36) Cf. Boyd, pp. 355-356.
- 37) ベルリン在住の亡命ロシア人が、想定される第一の読者だが、第二作であえて登場人物をドイツ人とした理由として、この作品がドイツ語に翻訳されて、ドイツ人の読者にも読んでもらう可能性を計算したことも考えられるから、第二の読者としてドイツ人も無視できない。ただ、それを考慮したとしても、本論の趣旨は変わらない。
- 38) ブクスは「謎かけ、意味のカモフラージュの手法」(прием загадывания, камуфлирования смысла)という言い方をしている。Букс, С. 43.
- 39) 平井正『虚栄と倦怠の時代』、せりか書房、1981年、186ページ。
- 40) 平井正『破局と転換の時代』、せりか書房、1982年、144-145ページ参照。
- 41) 同上、53ページ。なお、Connolly はマルタについて「物質的な富の常習的な消費者」(an inveterate consumer of material goods)と呼んでいる。Connolly, p. 209.
- 42) ただ、英語版でもマルタは「デパート」と言ったあと、弁解めいたことばを述べている。「たぶんデパートはちょっと言い過ぎね。男物しか置いていないのだから。でも、なんでも、なんでもあるのよ、ネクタイも帽子もスポーツ用品も」(Perhaps emporium is too strong a word, it carries men's things only, but there is everything, everything – neckties, hats, sporting goods.)(KQK, 29) と。なお、ロシア語版では「あそこには、男物しかないけど、その代わりなんでも、なんでもあるのよ、ネクタイも帽子もスポーツ用品も」(... там только мужские вещи, но зато – все, все, – галстуки, шляпы, спортивные принадлежности,)(КДВ, 149)となっていて、「デパート」の語はない。
- 43) Grayson, p. 90.
- 44) しかし、『キング、クィーンそしてジャック』のロシア語版を論じたEdmundsさえ、Later Dreier and Frants mount a staircase to find themselves, “s neozhidannost'iu sna” [with the unexpectedness of a dream] in a darkened department store. (下線は引用者) と述べて、ここがデパートであることを自明のこととしている。Cf. Edmunds, p. 168. さらに、ドリーニンもフランツが勤めた店を「巨大なデパート」(огромный универмаг)と呼んでいる。Долинин, С. 17.
- 45) Cf. Proffer, C.R. *A New Deck for Nabokov's Knives*. Appel, A & Newman, C. (ed.) *Nabokov: Criticism, Reminiscences, Translations and Tributes*. Northwestern UP: Evanston, 1970, pp. 293-309.
- 46) たとえば、Gloria-Palast, Ufa-Palast am Zoo, Wiking-Palast など。Cf. Schlögel, K., Kucher, K., Suchy, B., Thum, G. (Hg.) *Chronik russischen Lebens in Deutschland 1919-1941*. Akademie Verlag: Berlin, 1999, S. 607.
- 47) なお、ここには展示ホール、美容室、写真スタジオなどさまざまな施設も入る予定だった。Cf. KQK, 99.
- 48) 第8章には、英語版では「はやりのダンス・ホールやダンス・カフェ」(fashionable ballrooms and dancing cafés)(KQK, 151)が、ロシア語版では「はやりのホールやカフェ」(модных зал и кафе)(КДВ, 229)が登場しており、フランツはしばしばマルタとそこを訪れている。
- 49) Cf. Boyd, p. 85.
- 50) 「〈ヴィンターガルテン〉の星空の夜」とある。Подвиг, С. 113.
- 51) 『虚栄と倦怠の時代』、286ページ。
- 52) 同上。
- 53) 同上。
- 54) 英語版では motion picture (KQK, 117)とあるから、平井正の説明にある「活動写真」と重ね合わせることも可能だろう。
- 55) グロイルの『キャバレーの文化史』も、ヴァリエテを「世紀転換期」のシンボルとして捉えている。ハインツ・グロイル『キャバレーの文化史：道化・諷刺・シャンソン』(平井正、田辺秀樹訳)、ありな書房、1983年、92ページ参照。
- 56) なお、東区の「ヴィンターガルテン」に対して、西区ではルター街の「スカラ」が有名だったという。同上参照。

-
- 57) 英語版からは、ここでウンター・デン・リンデンが念頭におかれていることがわかる。
Up to now he had explored, besides the quiet quarter where he lived, only the avenue of lindens and its surroundings at the end of the city. (KQK, 67)
- 58) 実際邦訳者の出淵博氏は、この部分を「ベルリンにいらしたのはこれがはじめてね？」と訳している。ナボコフ『キング、クィーンそしてジャック』（出淵博訳）、集英社版世界の文学 8、1977年、30 ページ。
- 59) 「都市の見取り図 ナボコフのベルリン」 557-558 ページ。
- 60) Edmunds はロシア語版のフランツについて、「ベルリンの無数の誘惑に魅惑されながらも、臆病すぎてそれらを追い求められないフランツは、哀れな田舎者にすぎない」(Enthralled by Berlin's innumerable seductions but too timid to pursue them, the Frants of KDV is little more than a pathetic provincial bumpkin.)と述べている。Edmunds, p. 155. また、ブクスは首都とは「いなかでの夢が視覚化される場所」(место, где визуализируются провинциальные мечты)だとしている。Букс, С. 47.
- 61) См. *Подвиг*, С. 133-135.
- 62) Toker は『キング、クィーンそしてジャック』という題名は、ありふれた三角関係をなぞるものだとし、前例として『アンナ・カレーニナ』、『ボヴァリー夫人』、『クレーヴの奥方』、『ドルジェル伯の舞踏会』、『緋文字』などを挙げている。Cf. Toker, L. *Nabokov: The Mystery of Literary Structures*. Cornell UP: Ithaca, 1989, p. 57.
- 63) Rampton はフランツを「ジュリアン・ソレルやラスティニャックの滑稽版」(a comic version of a Julien Sorel or a Rastignac)と呼んでいる。Rampton, p. 16. ドリーニンも「片田舎の町出身の誰も知らない貧しい青年が、成功と富を夢見て、自分の空想が実現されるにちがいない首都にやって来る」(никому не известный бедный юноша из захолустного городка, мечтающий об успехе и богатстве, отправляется в столицу, где должны исполниться его грезы)という小説のはじまりは、「バルザックのラスティニャックを思わせる」(напоминает о бальзаковском Растиньяке)と述べている。Долинин, С. 16.